

# 郷土室だより

第153号

平成27年12月1日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 27-038

## 『江戸・東京の川』中央区の川(二)

前号では、江戸から明治初期の区内にあった河川を再確認し、震災前の東京市内の河川について概観してみました。掲載した「中央区にあった川」の図を見た利用者から「あらためて区内に水路が多かったことを知りました」との声もいただきました。

さて、今号では水の都『江戸・東京の河川や水路の両側に成立していた多くの河岸地について、具体的に考察してみます。

### ◇江戸湊と河岸

江戸以来、東京の中心部『現在の中央区の範囲及び江東地区の水路の大部分は、運河としての機能と役割を果たしてきました。水路の両側には河岸地が形成され、鉄道・自動車などの陸上交通機関が登場するまで、すべての物資は運河と河岸地を経て、江戸・東京の経済活動を支えてきたといっても過言ではありません。そして、これらの運河や河岸地は機能を発揮できるように、絶えず

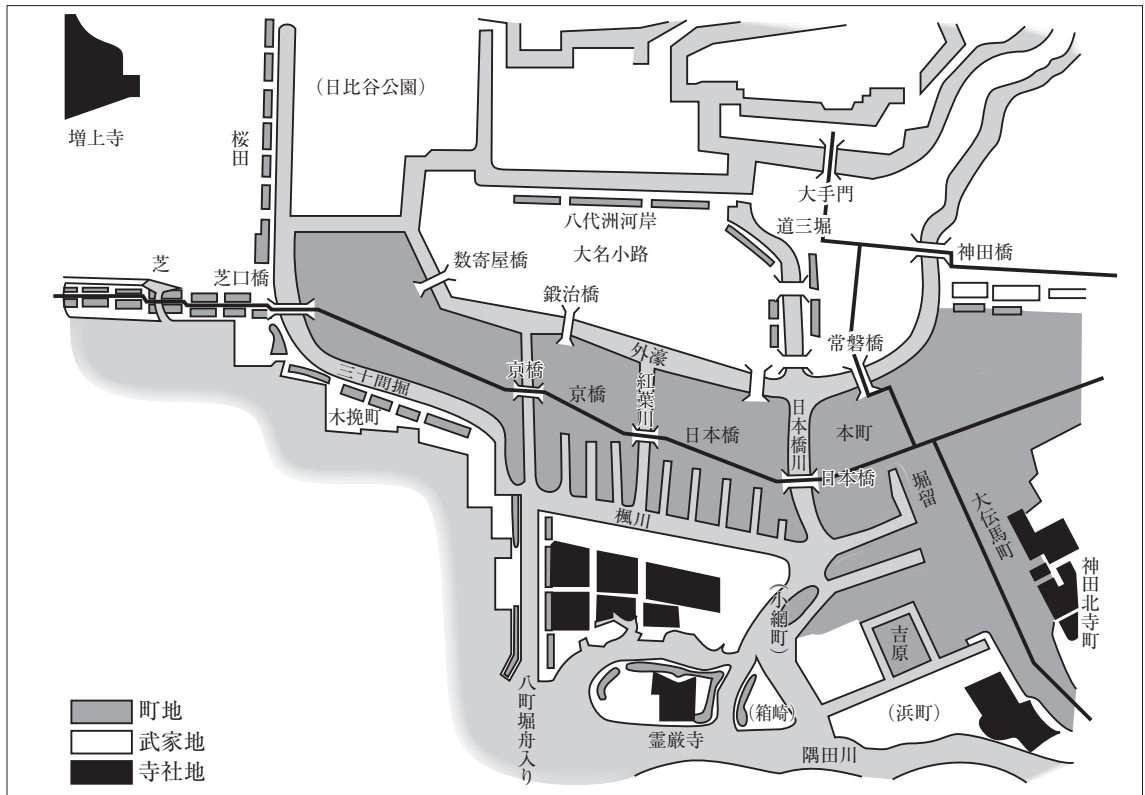


図1 『武州豊嶋郡江戸庄図』(寛永9年)より作成



改修と整備が行われてきました。

江戸の市街地は約七割以上が武家地で、寺社地と町地が残りの半分ずつを占めていました。水辺についても大量輸送に好都合な江戸湊<sup>II</sup> 海岸沿いや運河の大部分は、幕府や諸大名によって独占されており、町人が利用できた河岸は市街地に入り込んだ堀や運河、濠などの水辺の一部でした。

また隅田川左岸以東(江東地区)につらなる縦横の運河の沿岸にも、多くの河岸が成立していま

した。図2に示したとおり、江戸期には限られた水辺空間にも、さまざまな種類の河岸が成立し、いまだは想像もできないほど多くの河岸があったのです。

こうした河岸地は、江戸以来、俗称で呼ばれていましたが、明治九(一八七六)年から一三(一八八〇)年頃にかけて、町名の起立や改称に合わせて正式な名称がつけられました。当時の日本橋区で二七カ所、京橋区では二六カ所で、現在の中央区内には五三カ所もあったことになりました。

### ◇江戸湊

江戸は天下の三津(京都伏見・大坂と江戸の三ヶ所)と呼ばれていたように、全体的には津であり、隅田川河口とその右岸から芝浦につづく「江戸前」に面した河岸が、江戸湊と呼ばれています。

\*津とは、船舶の碇泊する所。ふなつき・人の集まる所を意味します。

天正一八(一五九〇)年に江戸入りした家康は、さっそく本拠地の江戸「湊」の整備を開始しました。將軍の代にして家康・秀忠・家光・家綱の四代、七〇年にもおよび大江戸建設の時代をむかえ、湊と市街地は、徳川氏の実力に比例して拡大しました。それは將軍の居城とそれを支える都市が必要とする、大量の物資の水上輸送手段を確保するためでした。

\*湊は、港の意味する「船つきば」とは違い、「水辺にあつまる」という状況を意味します。海に川があつまり、そこに舟があつまり、人と物が集まる場所を指しています。

多くは河口に成立して発達しました。江戸城の建設は、全国の大名家を動員する天下普請として行われました。全国から築城用の資材や物資が水上輸送を利用して、江戸湊に集中したわけでした。

江戸城の建設は、全国の大名家を動員する天下普請として行われました。全国から築城用の資材や物資が水上輸送を利用して、江戸湊に集中したわけでした。

### ◇初期の河岸

湊の具体的な施設である河岸と物揚場について簡単に説明します。江戸の場合、「河岸」とは川または海に面した町人地に付属する荷揚場をいいました。

河岸の文字通りの意味は川の沿岸のこと、ここであるという河岸とは川や海に面した町屋敷に付属する荷揚場をさします。たんに荷物が陸揚げされる物流センター的なものではなく、集まった荷物<sup>II</sup> 品物が商人たちと相対で取り引きされる、市場のような役割も果たしていました。

町が形成され発展するにともなう、水路に沿って取り扱う品物や業種ごとに河岸が成立しました。一方、武家地の場合には「物揚場」と呼ばれて、河岸とは区別して呼ばれました。家康が江戸入りした当時の江戸湊は、平川河口(現在の大手町付近)を中心とした日比谷入江沿岸一帯が、その範囲だったといわれています。

河岸も日比谷入江沿岸の八代洲(やよす)河岸と江戸前島の東岸に限られていたようで、入江の西側沿岸には日比谷村や桜田村、東側に老月村がありました。

江戸最初の河岸は、臨海部の「湊」からはじまります。家康が江戸入りした天正一八(一五九〇)年当時の江戸城は、日比谷入江に面した城でした。その後新たな江戸城は、日比谷入江沿岸の河岸を工事起点にして築かれました。

現在も残る和田倉門の呼び方の「ワタ」は海の意味で、海から陸揚げされた物資の倉庫を指した名称です。ここから日比谷までの入江の東岸(当時の海岸線)は、八代洲海岸と呼ばれました。

\*八代洲(やよす)の名にちなむ河岸で、江戸初期の中心的な河岸でした。また江戸城建設工事を支える

ともに経済活動の拠点となった江戸前島東側の河岸は、上方から下ってきた廻船の湊で、材木をはじめとした流通問屋が軒を並べていました。

日比谷入江の埋立後に作成された寛永江戸図〔武州豊嶋郡江戸庄図〕にも、大名小路の間に町屋や河岸地が残っており、当時の河岸の名残を知ることができます。

図 1 を参考にしてください。図 1 中央部分の八代洲河岸の北にある町地や、道三堀沿いの町地がその名残です。

江戸城は内濠・外濠と長大な石垣と濠に囲まれていましたが、城が完成すると外濠東側の多くは、町人の河岸地として利用されてきました。

話は変わりますが、関東地方で中世以来成立していた主要な湊は、江戸湊の中にも既得権を認められて、幕府から河岸地を与えられていました。その代表的な河岸が日本橋川沿いの木更津河岸と箱崎川沿いの行徳河岸です。

利根川や鬼怒川といった関東全域を流域とする奥川筋の水系にも多数の河岸が成立し、これらの河

岸と江戸とを結ぶ運河が建設されました。代表的な水路が小名木川や堅川で、とくに小名木川は利根川本流と江戸との大幹線でした。

江戸城築城にあわせて市街地の埋立が進められ、当初の海岸線や自然河川の姿は大きく変化しました。市街地の水路は大部分が陸地を掘ってつくったものではなく、水面を埋め残して運河化したことが大きな特徴であって、唯一の例外は神田川だけだったといっても過言ではありません。

### ◇その後の河岸

江戸の水際の大半は幕府や諸大名によって占用されていましたから、町人の河岸は市街地に入り込んだ濠や堀などの水辺に限定されていたことは、最初に書いたとおりです。

そして江戸の初期に日比谷入江と江戸前島東岸に限られていた集落も、家康の江戸入り直後の自営工事で開削された道三堀と日本橋

川の沿岸に移転させられ、材木町、柳町、舟町、四日市などの城下町が成立します。江戸城の城廓の拡

張により、水辺の集落が城のなかに取り込まれた結果の移転で、江戸城が完成するまでに、江戸の各所で何度もくり返された市街地の移動でした。

### ◇河岸の名称の特徴は

多くの河岸は巨大都市・江戸の建設・発展の原動力として機能した場で、その名称は様々です。

中世以来の江戸原住民の居所にちなむものに木更津河岸、行徳河岸、四日市河岸、小舟河岸、日比谷河岸などがあり、河岸が扱う品名からつけたものも多くみられます。魚河岸をはじめ白魚河岸、大根河岸、米河岸、塩河岸、材木河岸などです。

また向井将監（江戸湊の警備隊長）にちなむ将監河岸、湊河岸。ほかに人名から市兵衛河岸、左衛門河岸。東北征伐時の源伝説にちなむものには兜河岸、鎧河岸がありました。

さらに同一場所でも時代により河岸名を変えたもの、同時に二つ以上の河岸名をもつものもありました。

### ◇江東地区の河岸

江戸城建設と市街地の拡大にあわせて、利根川や鬼怒川両水系の多くの河岸に奥川筋の河岸と江戸の河岸を結ぶ水路が建設・整備されました。江東地区の小名木川と堅川がその水路で、両岸にも多くの河岸がありました。江東地区の当時の陸地は、隅田川沿いの自然堤防の上だけで、そこに本所・深川の獵師町が起立します。

明暦三（一六五七）年の大火を機会にして、漁師町を拠点に江東地区の干拓・埋立が進行します。当時すでに飽和状態になっていた江戸の河岸機能を補うことが目的で、市街地の河岸から、倉庫の機能を分離・移転させる措置だったのです。

本所・深川の開発は、江戸の市街地の発展・拡大による物資量の増加と多発する火災に備えたものでした。商売は従来の市街地の河岸、物資の保管は本所・深川という分担当が成立したことになります。その代表が材木町の木置場（木場）でした。

以下、次号に続きます。

（菅原健二）